

<特集:台湾で考える日本文学教育>

台湾の高等教育機関における日本語教育と「文化・教養」の継承のあり方

— 水村美苗『日本語が亡びるとき』をめぐる議論を補助線として —

坂元さおり

1、はじめに

高橋源一郎は「時間を分節化していくことが歴史だとしたら、90年代以降は歴史が不在だとしか言いようがない」¹と述べているが、作家水村美苗がこの「歴史の不在」の問題にからめて発した一連の言説は、大きな論争を巻き起こした。というのは、評論集『日本語が亡びるとき』(筑摩書房、2008)等²で水村は、「教養」や「上質な文化」を担ってきた「階級」が日本から消滅したのは高度成長期以降のことであり、全てが平均化した現代日本において、サブカルチャー等、非常に「幼稚」な文化のみが横行しているが、今、問い直されるべきは、日本人が後々継承していくべき「文化」の質であり、それは「良質な文化(教養・カルチャー)」を基としたものであるべきである、と警鐘を鳴らし、それが賛否両論を巻き起こしたからである³。

こういった水村の議論が大きな話題となったのは、同時期、同じような問題意識が多くの論者に共有されていたからだ。例えば大澤真幸⁴は、近代日本において哲学・思想をリードしてきたのは近代文学、それも「小説」であったが、「小説の思想的機能」は90年代以降「失われよう」としており、そういった「近代文学の終焉」は日本のみの出来事ではなく、地球的な規模で起きている、と柄谷行人や東浩紀の言葉を参照しながら述べているし、押野武志⁵は、近年の

1 加藤典洋、高橋源一郎「いまどきの小説の気分」『小説 tripper』・冬季、朝日新聞社、二〇〇四、水村美苗『日本語で読むということ』・『日本語で書くということ』、筑摩書房、二〇〇九・四

2 他には水村美苗『日本語で読むということ』・『日本語で書くということ』(筑摩書房、二〇〇九・四)がある。論争の詳細は『ユリイカ 特集 日本語は亡びるのか?』(青土社 二〇〇九・二)に詳しい。

3 こういった水村の一連の言説に関しては、以前、拙論で取り上げたことがある。「水村美苗『本格小説』論」、『日本語日本文学』、輔仁大学、二〇一〇・七

4 大澤真幸『思想のケミストリー』紀伊国屋書店、二〇〇五・八

5 押野武志「フラット化する文学」『日本文学』日本文学協会、二〇〇八・一

大衆消費社会の中で「フラット化」した「日本文学・文化」が流通・受容されることの問題について論じている。

一方、こういった90年代以降の「歴史の不在」、「近代文学の終焉」といった状況を肯定的に捉えた論としては、宇野常寛の『ゼロ年代の想像力』（早川書房、2008）が挙げられるが、「サブカルチャー」を新たな「教養」として見なし、熱く論じる宇野の議論は、水村の議論とは対照的である。同年に発表されたにもかかわらず、両者の間に「接点」はない。斎藤美奈子⁶はこの両者の「接点のなさ」にこそ、2008年の日本の批評の根本的な問題があるのではないかと指摘しているのだが、その後まもなく出された笠井潔の『例外社会』⁷では、所謂「サブカルチャー」と「ハイカルチャー」とを関連付けながら現代日本の状況を読み解こうとしており、そういう意味では斎藤が問題視する「2008年の日本の批評の根本的な問題」に対し、笠井なりに答えようとしている姿をそこに読み取ることもできる。

以上、簡単に「日本語・日本文学・日本文化」をめぐる近年の日本の言説の流れを見てきたが、こういった言説を海外、特に台湾の日本語教育の現場から眺めてみた場合、どういった問題が現れるだろうか。筆者は2000年から文学教育に力を注いできた輔仁大学に勤務し、日本語教育、日本近代文学教育に関わってきたが、実際の教育現場にいて、上記のような問題にどう向き合えばいいのか、ということを考えさせられることも多い。

例えば、過去五年間の輔仁大学に提出された近現代文学関連の修士論文のテーマ⁸を見ても、いわゆる「カノン」と称される作家・作品が取り上げられることは相対的に少なくなってきた

6 斎藤美奈子「芸時評」『朝日新聞』、二〇〇八・十一月・二十六

7 笠井潔『例外社会』朝日新聞出版、二〇〇九・三

8 過去五年間(94~98)輔仁大学日本語文学系に提出された近現代文学関連の修士論文

<http://www.jp.fju.edu.tw/modules.php?name=Briefings&op=viewarticle&artid=96> より一部引用。

井上智繪	「呂赫若研究—家族という視点から」	98
周美瑩	「村上春樹研究—村上文学の動物相をめぐって—」	98
陳苑蕙	「村上春樹論—自己物語とコミュニケーション—」	98
丁璦琳	「賢治童話における批判意識」	98
簡中昊	「植民地における蕃地文学—大鹿卓を例にして」	98
吳浩璋	「角田光代の作品における家族像—『空中庭園』、『対岸の彼女』、『八日目の蟬』を中心に」	98
朱立文	「山田詠美論—「家庭」と「学校」の狭間で「居場所」を探す子供達—」	98
王璽惠	「三浦綾子作品研究—『氷点』、『塩狩峠』、『道ありき』を中心として—」	98
林育樟	「松浦理英子研究—「性」の通念に対する問い直し—」	97
簡佩珊	「宮沢賢治の童話研究—動物の擬人化をめぐって—」	97
游婷鈺	「川上弘美研究—「自他」の境界と距離をめぐって—」	97
徐小雅	「桐野夏生研究—女性表象と社会性をめぐって—」	97

ている。そのかわりに目立つようになったのは、「サブカルチャー」に焦点を当てた論考だろう。実際、筆者が担当中の院生で、こういったサブカルチャー作家・作品をテーマに選ぶ院生は現在、半数以上を占めるようになった。

サブカルチャー的作家・作品を、院生が修士論文のテーマに取り上げることに對して、筆者自身は決して否定的ではない。むしろ、こういったテーマに意欲的に取り組む学生のほとんどは、「現代日本文化」を「私自身の文化」として熱く語る院生が多く、「文化継承」の新しい形を見せてもらったようにも感じ、大きな刺激も受ける⁹。それに加えて、近年の近代化論や国民国家論、ジェンダー論等の議論の深まりの中で、従来の「カノン」はその歴史性を問われている。

林殉儀	「清涼院流水の異端性—出世作と本格ミステリーとの比較から—」	97
何軒璋	「オタク文化におけるライトノベルの反復生産とその可能性」	97
郭于寧	「笙野頼子研究—「共同体」と「個人」をめぐる問いかけ」	97
查日懿	「水村美苗論『私小説 from left to right』を中心に」	97
李中宜	「少女マンガから見出される諸現象—矢沢あい『NANA』を中心に—」	97
歐宛淳	「村上春樹作品中の「自我」像—長編作品『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』を中心に—」	97
李齊芸	「志賀直哉の死生観」	97
蔡晨曦	「ライトノベルにおける同性愛文学—秋月こおを中心に—」	97
王詩芬	「谷崎文学における夫婦像の研究」	97
吳繪利	「砂の器の意味するもの—現在から過去へ—」	97
楊嘉怡	「三島由紀夫の愛情像における悲劇性—前期長編作品を中心に—」	97
林鍵麟	「村上春樹作品と自己治療—初期四部作を中心に—」	96
賴俐欣	「樋口一葉研究—「大つごもり」「たけくらべ」めぐって—」	96
沈啟鴻	「近現代小説に見る信長像」	96
林佩菁	「太宰文学における幸福感—女性独白体の作品を中心に—」	95
林瑞珍	「宮部みゆきの推理小説研究—作品に描かれた家族関係を中心に—」	95
賴信安	「漱石の『それから』の試論—「意志」と「自然」を軸にして—」	95
陳致遠	「「竜馬がゆく」と「燃えよ剣」から見た司馬遼太郎の幕末志士像—坂本竜馬と土方歳三を中心に—」	95
吳季青	「村上龍研究—前期作品を中心として—」	95
張雅婷	「小島信夫『抱擁家族』論—時代・社会との関わりから—」	95
陳寧蕙	「夏目漱石『こころ』の研究—「家」めぐって—」	94
彭瑞竹	「向田邦子研究—ホームドラマを中心に—」	94
薛淑靖	「遠藤周作文学における罪意識の変容と救済の道」	94
曾大偉	「佐藤春夫文学における異文化描写—「旅びと」「霧社」を中心に—」	94

9 学部の四年生向けに開講している『日本の文化と思想』では、いわゆる「サブカルチャー」と呼ばれる作品も積極的に取り入れている。この点については「台湾の日本語教育における異文化理解教育—輔仁大学「日本文化と思想」での実践を通して—」(『世界の日本語教育』2010・8・1政治大学)で発表したことがある。

発表者自身も近現代女性文学に関心があり、大学院生向けに開講する授業では、そういった視点からテキストや論文を選ぶことが多い¹⁰。

しかしながら、それと同時に、漱石や鷗外、志賀、芥川、谷崎、川端、三島といったいわゆる「近代文学」の「カノン」と称されてきた作家たちの代表作にほとんど触れないまま、卒業していく院生も少なくなく、果たしてこれでいいのか、という違和感も感じている。特に水村の『日本語が亡びるとき』及び同書をめぐる議論を通して、台湾で日本語教育、文学教育に関わる自分自身のあり方について、考えさせられる点も多い。

本稿では、この水村の同書とそれをめぐる言説を取り上げながら、台湾という日本とは複雑な過去の歴史を持つ地域の高等教育機関で、「日本近代文学教育」を行うことはどういうことなのか、何を目的とするべきなのか等の問題について考えてみたい。そうすることで、「現代日本文学・文化」をめぐって今、盛んに語られている日本の言説を、台湾で捉えなおすことの意味を浮かび上がらせることができるのではないかと思う。

10 院生向けに開講している『日本近現代文学導論』で一学期に使用する教材は①『近代の短編小説 明治篇』(九州大学出版会)②『近代の短編小説 大正篇』(同)③『現代短編小説集』(双文社出版)④『短編 女性文学〈近代〉』(おうふう出版)⑤『短編 女性文学〈現代〉』(同)から受講者が選ぶ(10 作品前後)。

二学期は発表者がテーマを設定し、作品を決める。なお去年まで(ここ五年)のテーマと作品は以下の通り。

- ・ 98 年度「文学に見る労働問題と階級」(是枝裕和『誰も知らない』、葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』、小林多喜二『蟹工船』、桐野夏生『OUT』、角田光代『エコノミカル・パレス』、モブ・ノリオ『介護入門』、雨宮処凜『排除の空気に唾を吐け』)
- ・ 97 年度「八〇年代以降の日本の文学・文化における〈少女〉の表象」(朴哲洙『301/302』、ピーター・グリーンウェイ『コックと泥棒、その妻と愛人』、吉本ばなな『キッチン』、岡崎京子『リバーズエッジ』、安野モヨコ『脂肪という名の服を着て』、松浦理恵子『親指pの冒険』、桐野夏生『グロテスク』)
- ・ 96 年度「日本近代文学における「老い」」(川端康成『眠れる美女』、谷崎潤一郎『瘋癲老人日記』、有吉佐和子『恍惚の人』、モブ・ノリオ『介護入門』、川上弘美『センセイの鞆』、桐野夏生『魂燃え!』)
- ・ 95 年度「近代文学における戦後」(坂口安吾『白痴』、坂口安吾『桜の森の満開の下』、三島由紀夫『仮面の告白』、三島由紀夫『春の雪』、島田雅彦『無限カノン』三部作)
- ・ 94 年度「近代文学におけるマイノリティの表象」(NHK『日本語であそぼ』、『パッチギ』、『ナビイの恋』、リービ英雄『星条旗の聞こえない部屋』、水村美苗『本格小説』、桐野夏生『グロテスク』)

2、水村が提唱する「日本近代文学」の「カノン」擁護論

水村の一連の議論を通してまず感じるのは、水村が「英語」との比較の中で、日本語を位置づけよう、としている点だ。例えば『日本語が亡びるとき』への毀誉褒貶を受け、『ユリイカ』紙上で水村はインタビューに答える形で執筆意図を説明しているが¹¹、なぜ今「現代日本の文化」として「継承」されるべきなのが、「幼稚」な「サブカルチャー」ではなく、「良質な文化(教養・カルチャー)」なのか、という点について、「英語以外の国語が〈現地語〉になってしまいうる構造が世界にあり、その構造の中で、どうしたら優れた日本語を流通させられるか」、「そこで重要になってくるのが、カノンを継承すること」だからだ、と主張している。

カノンとは文学の神格化ではありません。英語でも仏語でも独語でも、それぞれの国語が達した高みを護るため、その国語が成立してから書かれてきた作品の中で、最も優れたものをカノンとしてきました。(略)

日本語は、非西洋語なのにもかかわらず、近代文学のカノンをもっているという珍しい言葉なんです。しかもそのカノンはカノンの名に値する優れたものだと思います。その事実に価値を見出さないのは、本当に勿体ないと思います。(下線引用者、P.50)

この「日本語は、非西洋語なのにもかかわらず、近代文学のカノンをもっているという珍しい言葉」という水村の発言は、日本が「近代化＝帝国化」の歴史を歩んできた、ということを否応なしに連想させる。そういう意味では、この水村の発言は非常に傲慢な発言と取られかねない危うさを含んでいる。実際、四方田犬彦は水村の議論に心情的には沿いながらも同時に、日本による朝鮮の植民地支配やアイヌ語の問題に触れてもいる¹²。

ただし、ここで注目すべきなのは、水村が「日本語」を決して覇権的な言語とは考えていない点だろう。むしろ、「ブルドーザーで押しつぶされてしまう側」の言語」といった比喻を用いな

11 水村美苗インタビュー「世界史における日本語という使命」『ユリイカ 特集 日本語は亡びるのか?』青土社 二〇〇九・二

12 四方田犬彦「亡びるなら亡びてしまえジャパニーズ」前掲『ユリイカ』所収

から、「いかに非西洋語である日本語が脆弱なものでしかないかという事実」に目を向けさせようとしている。

たとえば、ご存知のように、近代に入ってから、文学においては常にカノン批判というものがあります。そして、アメリカでは、ずいぶん前から、「Dead White Males」、すなわち、「死んだ白人の男」が書いたものばかりがカノン化されているという事実があります。それで、今学校ではトニ・モリスンのようなアフリカ系アメリカ人の女性作家を一所懸命読ませようとしている。(略)ところが、日本語で書かれたもののカノン批判などを、それこそ無批判にしていたらどうなるのか。覇権的な言語ではないどころか、西洋語でさえない言葉においては、まずはカノンを護っていかなければならないのです。もちろん、まずはカノンを作らなくてはならないし。(略)英語と日本語はまったくの非対称性の中であって、私たちは、うかうかしていると、ブルドーザーで押しつぶされてしまう側にいるわけです。その押しつぶされてしまう側にいる人間が自ら進んで自滅する必要はない。日本語が、非西洋語でありながら、近代文学のカノンを作ることができたというのを私は実にありがたいと思っています。日本に福沢諭吉はもちろんのこと、漱石や鷗外や谷崎が在ることを実にありがたいことだと思っています。そして、かれらを含む、先人が残した日本語という財産を最高の形で生かし続けるのは、非西洋語で読み書きする人間の義務だと思うのです。今は、その非対称性を視野に入れながら、日本語を読み書きしなければならぬ時代に入っていると思います。(太字、下線引用者、P.44)

35

上の引用で「先人が残した日本語という財産」として、水村が福沢、漱石、鷗外、谷崎、といった文豪(思想家)の名前を挙げている点にまず注目しておこう。これらの「先人」に共通するのは、「日本の近代化」の過程で「西洋の衝撃」に直面し、その葛藤の痕跡を日本語で残した、という点だろう。そしてこういった水村の認識は、前述した大澤が柄谷や東の言葉を引用しながら述べた言葉—「日本の近代にあっては、特定の分野の専門知の範囲を越えて、一般の公衆に思想を共有したり、彼らの知を刺激してきたのは、主に文学者や文芸批評家だった」¹³とも相通じるものだ。

13 注4に同じ。

なお大澤は、こういった日本の「知」のあり方を、ラカンや溝口雄三の議論に言及しながら、「漢字仮名交じり文」という表記体系とパラレルな現象である、と指摘している。即ち、日本では知識人が西洋(古くは中国)の哲学や思想を「日本語」に「翻訳」しようとする際、「漢字」表記されることで、抽象概念は「日本語の共同体」においては、「外部」と見なされ続けてきたため、「生の深部に宿るような深刻な問いに対処しうるもの」としては、やはり「文学や文芸批評を必要としたのだ」。

水村はそのような作家の一人として漱石の名を挙げているが、水村が作家デビューしたのは『続 明暗』(1990)であり、これは衆知のように漱石の未完の遺作『明暗』(1916)を書き継ぐ試みであった。日本国外で育ち、英語、フランス語に堪能な若い才媛(水村)が、近代日本の男性文豪の文体を真似、遺作を書き継ぐこの試みは、当時、大きな話題を集めたが、水村は後に『私小説 from left to right』(1995)等で、日本からアメリカに移り住み、英語に不自由する少女期の「私」を支えたのは、「日本近代文学」を読む時間だった、と「私小説」風に、自身の「日本近代文学」への偏愛を語っており、これは後の『日本語で読むということ』『日本語で書くということ』(共に 2009)等のエッセイでも繰り返し出てくる。

なお、水村が『私小説 from left to right』を連載していたのは浅田彰、柄谷行人が編集委員を務めていた『批評空間』誌上(1992～1994)においてであったが、折りしも本作連載の最終章が掲載された II-3 号(1994)において、編集委員である浅田、柄谷がフェミニズムの論客である上野千鶴子と水田宗子を迎え、「日本文化とジェンダー」という共同討議を行っている¹⁴。そして、その共同討議の場で、浅田や柄谷によって水村の作品が言及されているのだが、この場に出た問題意識は、後に水村が『本格小説』(2002)や『日本語が亡びるとき』等で展開する議論とかなりの部分で共通している。そしてその場で議論された点は、現在でも「日本語・日本文学・日本文化」を論じる際、何を「伝えるべきか」という点で大きなポイントとなってくるとと思われる。そのため次節では、この共同討議において水村の議論がどのように先取り・共有されているかを確認しておこう。

14 「特集=日本文化とジェンダー」『批評空間』II-3、一九九四・十

3、文学における「シンギュラー」さと普遍性

共同討議「日本文化とジェンダー」では、ジェンダー問題を中心に、様々な問題が討議されているが、後半、浅田彰が主導する形で、漱石が「低級な作家たち、固有名で記憶する必要のない作家たち」と比べものにならない「シンギュラー」な作家であり、「文学に関わるかぎり、代入不可能な固有名をもった大文字の作家というのがどうしても必要」、「社会学のレヴェルでは、世界の数百の文化圏を完全に相対的に比較することが可能かもしれないけれど、文学のレヴェルでは、大文字の作家がいないと話にならない」と強調している点にまず注目しておきたい。というのは、「文学のレヴェル」で「大文字の作家」(カノン)なしには「話にならない」という問題意識こそ、前節で見た後の水村の議論を先取りする(重なる)ものだからである。

この浅田の発言を受け、上野は水田論文¹⁵に触れながら「女」の描き方一つとっても、「低級な作家たち」だと、「女という記号を使って繰り返し自己の内なる性幻想を再生産し続けただけであって、女を描いたこともなければ描こうと思ったこともない」と続け、これに対し浅田は「夏目漱石なんかのレヴェルで言うと、そのようにはっきりした鏡像的な他者ではない不透明な女性性のようなものが出てきて、読み手もそれを問題にせざるをえない」と漱石作品に書き込まれてしまった「不透明な女性性」を高く評価している。

これに続けて柄谷も「日本の近代文学は、二葉亭四迷でも山田美妙でもだいたい『女学生』という存在にショックを受けたところから始まって」おり、「異性が知的であり、つまり、対自存在としてあるということへの困惑から始まっている」、「漱石も同じ」だが「この二重性を徹底的に追求していると思う。『明暗』になると、そもそも主人公が女」になるが、この『明暗』の女性の語りは、男性作家が女性を主人公として女装文体で書く行為とは全く異なっている、だからこそ、近年、水村美苗のような女性作家が『続 明暗』を書いたのだから、と続けている。

この柄谷の発言に関しては、水村が「女性」だからといって「女装文体」から逃れられるわけではない、と近年の近代女性作家の研究の集積を踏まえて反論することもできるが¹⁶、それは別の機会に論じるとして、この共同討議において後の水村による議論との重なりで注目されるのは、上で論じたようにまず、水村の前作『続 明暗』が取り上げられながら、漱石の「シンギュ

15 水田宗子「女への逃走と女からの逃走—近代日本文学の男性像」『日本文学』日本文学協会、一九九二・十一

16 樋口一葉等、近代の女性作家が読者層に受け入れられるため、「女装」文体を用いたことはしばしば指摘されている。近年では小平麻衣子『女が女を演じる』(新曜社、二〇〇八)など。

ラー」さ(独自性)が強調され、「固有名をもった大文字の作家＝カノン」なしには「文学」研究は成立しえない、と主張されている点だろう。

ちなみに社会学者・上野の立場は浅田や柄谷とやや異なっており、漱石が「他のなにものも取り替えがきかないシンギュラーなものだというのはまったくそのとおり」だが「それに特権性を与える必要は」ない、と主張し、これに対し浅田は上野の発言が「社会学的傲慢」だと批判している。こういった「文学／社会学」の線引きをめぐる問題は、昨今の文学研究のあり方にも通じる問題だが、現在、「文学・語学教育」の「教材」として、結局何が、どういった理由で選ばれるのか、という日本国内外での教育機関における根本的問題とも関わってくる問題だと言えよう。

なお、本稿で度々引用する社会学者かつ思想家・大澤真幸は、(近代日本においては特に)「哲学のみを論ずる言説は」「専門家の中に孤立するほか」なかったが、「文学」を論ずる言説は「思想の言葉として受肉する」可能性を秘めていると言う¹⁷。そしてこれは「近代日本文学」に限られる話ではなく、優れた文学作品は全て一ギリシャ悲劇『オイディプス王』にせよシェイクスピアの作品にせよ一、人を感動させ、衝撃を与える力を持っているが、「これらの作品が、われわれの体験との類似性がほとんどもないことがらを表現しているにも」かわらず、なお、われわれにとって魅力的だということが神秘だったのではないかと問う。それはそして「個々の文学作品は、それぞれの特異であるがゆえに、逆に普遍的な訴求力をもつ」ことに注意を促している。

大澤によるこの「文学(研究)」への提言は非常に重要で、文学研究者のみならず、人が「文学」に向き合うことの根本的な意味を考えさせられる。そして何より、「実用的語学教育」を論じるだけでは見失われがちな大切な問題を大澤の指摘は突きつけているのではないだろうか。ただし気になるのはその大澤もまた、「文学(小説)の力」は 90 年代以降、急速に失われてきている、と指摘している点であり、この問題は先ほどの共同討議でも話題となっている。

この大澤の語る危機感は、討議の後半で上野の(日本近代文学において)「女は他者ではなく、記号でしかなかった」という発言を受けて柄谷が「日本の男だって西洋にとって(「他者」たりえないという点でー引用者注)同じ」で「せいぜい謎めいた異者にすぎない」、「日本は知的に植民地みたいなのに」「日本のインテリの多くがそれを何とも思わない」し「その自覚もない」と、

17 注4に同じ。

その「非対称性」をめぐって苛立ちを口にしているが、その上で「世界資本主義の趨勢」の中で、日本文化は早晩「マイナーカルチャーのひとつ」(上野)になる運命から逃れられないのではないか、という危機感と重なるものだろう。そしてこれこそ正に後に水村が『日本語が亡びるとき』で展開する「日本語・日本文化が亡びる」危機感と軌を一にする問題意識と言えるだろう。

このように見ていくと、2008年に水村の『日本語が亡びるとき』をめぐって展開された議論の骨子は、1994年時点で柄谷や浅田によって既に出されていたと言えるし、同時にその議論が、水村の『続 明暗』や『私小説 from left to right』といった実作に触発される形で共時的に起きてきている点を確認できる。そして付け加えるならば、今や現代日本サブカルチャーの代表的論客と見なされる東浩紀が柄谷や浅田といった『批評空間』の論客達から徐々に距離を取り始め、独自の路線を歩むようになるのもこの時期のことだ¹⁸。とはいえ、東のサブカルチャー批評は従来の「教養」をベースとしたものだが、しかし後続の論者にその「教養」は共有されているだろうか。例えば宇野常寛のサブカルチャー批評が(意図的にせよ)それまでの「教養」を切り捨てたものであったのは前節で述べた通りだが、その同じ時期にそのような現代日本の言説への批評として水村の議論は発表され、大きな話題を呼んだのだ。この点を踏まえて、次節では水村の『日本語が亡びるとき』における主張と照らし合わせて、より詳細に見ていきたい。

4、「文学教育」と「語学教育」とは分けられるのか

『日本語が亡びるとき』を水村が執筆するにあたって、読者として想定していたのは「大学の先生、大学院生、日本語の先生、編集者など」(P.39)¹⁹であつたらしい。同書並びに水村のインタビューや他の水村作品を読んで強く伝わってくるのは、水村が子供時代に日本からアメリカへ移り、「外国人」(マイノリティ)という身分を常に自覚させられながら自らの「知」を磨いてきた、という彼女の成長背景である。

例えば『私小説 from left to right』では、主人公美苗がハイスクール時代に受けた「国語(英語)教育」が主人公のアイデンティティを根底から揺さぶり、自らを見つめなおす契機となる過

18 東浩紀『郵便的不安たち』朝日新聞社、一九九九

19 注11に同じ。

程が鮮やかに描かれているが、『日本語が亡びるとき』最終章「英語教育と日本語教育」でも同様の問題は取り上げられている。やや長い引用だが、今の台湾の高等教育機関における「日本語・日本文学教育」を考える上でも重なる点があるように思われるので以下に引用する。

思い出すのは、私自身一時アメリカの学校で入れられていた、「dumb class」—「お馬鹿さんのクラス」である。

アメリカでは、地域の差、貧富の差、さらには能力の差に応じて、まったくちがったレベルの教育が平気で与えられている。私が通っていたアメリカの公立のハイスクールでは、数学や理科の授業は難易度を自分で選べたが、〈国語〉の授業だけは、過去の成績をもとに、学校側が生徒を上中下の三種類のクラスに振り分けた。格別に優秀な生徒を集めた上級のクラスではギリシャ神話やホメロスまで遡って古典の素養を身につけさせられた。ふつうの生徒を集めた中級のクラスではアメリカ文学と共にシェークスピアやディケンズを読まされた。どちらのクラスでも、可能な限り、英語で書かれた文学の伝統を継承させるのに主眼が置かれていたのである。そのような贅沢が許されたのは、比較的裕福な人々が住む郊外にある恵まれた学校だったからであろう。

ただ、それとは別に、ふつうの授業にはついていけない一握りの生徒たちを集めた下級のクラスがあった。そこで行われた授業は、英語で書かれた文学の伝統の継承などとは無縁の授業であった。まさにアフリカの田舎の子供を集めたのと同様、読み書きができるのに主眼が置かれていたのである。

英語ができない私はそこに入れられた。

数学や理科や社会の授業では、教科書＝〈テキストブック〉を使ったが、英語という〈国語〉の授業だけは、教科書を使わず、学校が所有している本＝〈テキスト〉を次々と読んでいった。ところが、である。「お馬鹿さんのクラス」は別であった。本を次々と読んだりすることはなく、一冊の教科書が使われたのである。日本のあの信じがたいほど薄っぺらい〈国語〉の教科書よりはるかに分厚かったが、それでも教科書は教科書でしかない。誰が書いたともわからぬ、生徒たちと同じ年ぐらいの主人公が生徒たちと同じような日常生活を送っている物語—しかも生徒

たちが理解できる文章で綴られた物語だけが入っている教科書であった。(P.315～316、傍線、太字、引用者)

このように、水村はアメリカにおいて「英語(国語)教育」の場で極端な二分化が進み、「上級者」(エリート)には「英語で書かれた文学の伝統の継承」が期待され、またそれに対応する教育が徹底的になされているのに対し、「お馬鹿さんのクラス」(貧困層、移民層、能力的に劣ると見なされた者たち)に対しては「読み書きができることが主眼」とされ、「誰が書いたともわからぬ」「生徒たちが理解できる文章で綴られた物語だけ」の世界に放置されてしまう、と述べる。

こうやって見てくると、冒頭に挙げた水村の過剰なまでの日本の「幼稚な」サブカルチャー批判は、水村自身の体験に基づいていることは明らかだろう。即ち、「dumb class」で用いられる教材が「誰が書いたともわからぬ」「生徒たちが理解できる文章で綴られた物語だけ」であり、「英語(日本語)で書かれた文学の伝統の継承などとは無縁」の世界に過ぎず、「階層と格差」を自明とする社会においては、「dumb class」に追いやられ、その「文化の継承」のサイクルから遮断されることに他ならないからである。そればかりか、「追いやられてしまっている」という屈辱感もなしに、嬉々として「フラット化」の道を進む(ように見える)現代(特に 90 年代以降)の日本文化(教育)の趨勢に対し、水村は嫌悪感・失望を隠せないのだ。

水村の上記エッセイにおける主張だけを読むならば、エリート養成に主眼を置く、やや上から目線の「教養＝階層」擁護論のように見えてしまうかもしれない。だがこれに先行する水村の小説『私小説 from left to right』での同場面を読むなら、エッセイとは全く異なる印象を受ける。というのも『私小説 from left to right』を読む際、筆者が最も心を動かされる場面の一つが、美苗が「dumb class」に追いやられるこの場面だからだ。

主人公美苗は英語にもアメリカの学校にも生活にも慣れず、惨めな気持ちで鬱々とした毎日を送っている。言葉を思うように操れないせいで、友達もなかなかできず、自分の居場所はどこにもない、と美苗は思いつめる。そんな美苗の唯一の救いとなるのは、日本語で書かれた日本の近代文学を読む時間なのだ。一葉、漱石、芥川、谷崎、有島といった文豪たちが書いた作品世界に没頭することで、美苗は「人間」として扱われた、という大きな慰めと喜びを得る。だ

がそのような美苗も、「英語」を使いこなす力は十分には身につけておらず、学校の「国語」のクラスでは「dumb class」に放り込まれる。

だがこの「dumb class」を担当する国語教師は、美苗が拙い英語で「故郷＝日本の田舎の夕暮れの風景」を綴る作文に眼を留め、拙いながらも「言語＝英語」で表現しようとする美苗の思いをきちんと掬い取ろうとする。彼は「dumb class」を担当すると同時に、英語力に秀でた学生を集めた「最上級クラス」も担当していたため、美苗に「dumb class」と並行してこの「最上級クラス」にも出るように勧める。そこで美苗は「言語」で表現すること、英語(文学)で自らの「知」を鍛えられることの楽しさとスリリングさに次第に気付いていく。

この場面を読むならば、最上級クラスで「教材」とされるギリシャ神話やホロメスといった古典や、シェークスピアやディケンズといった英文学の作品は、決して単なるお飾り的な死んだ過去の「教養(文化)」としてあるわけではないことが、美苗の目線を通じて伝わってくる。つまり、言葉が通じなくて異国に居場所を見つけられなかった美苗の心を「日本近代文学」が支え、鍛えもしたのと同じように、英語話者が「英語」での表現力を自らのものとしていく過程で、これら「英文学」が、自らの心を支え、思考力を鍛えるための最良の糧でもあることが、この場面では鮮やかに描かれているからだ。

筆者がこの場面に強く心を揺さぶられるのは、「言葉」を学び、身につけていくことの苦しみと喜びが、そこに生き生きと描かれていると思うからだ。と同時に、語学を学び、同時に語学教育に携わる者の一人として、筆者はこの場面を読むたびに、何か貴重な贈り物を偶然贈られたような気持ちになる。そしてこの場面が筆者の琴線にこれほど強く触れるのは、「dumb class」であれ「最上級クラス」であれ、「言語教育」の場で「物語」(文学)が「教材」として選ばれ、そこに主人公美苗が初めて「居場所」を見出す物語が重ねられて描かれているからではないか、と思うのだ。

『私小説 from left to right』の中で、長じて美苗は英語を流暢に話せるようになり、高いレベルのフランス語力も習得していく。だが東洋人女性としての身体を持つ美苗は、アメリカでもフランスでも、その場に溶け込めきれない思いを抱き続ける。このように美苗が常に強い違和感を抱き、強度の精神的緊張を強いられつつも、そんな美苗を美苗のままに支えていくものは、美苗の血肉となった「言葉たち」なのである。それは時に日本語であり、英語であり、フランス語でもある。その「言葉たち」は時に物語として、時には歌のような呟きとして、日本語で、そして

時に英語で、写真も混ぜられながら綴られていく²⁰。『私小説 from left to right』を読むと、こういった様々な言語の集積こそが、美苗の最終的な「居場所」となっていることに気付かされるし、そしてそれを読む読者もまた、この作品を読むことで、その「居場所」を共有していると感じさせられるのだ。

この点を踏まえて、『日本語が亡びるとき』における水村の主張をもう一度考えるならば、水村が「教養(良質な文化)の保持」の必要性を唱えるのは、(何語であれ)そのような言語の集積(財産)があるからこそ、人は辛うじて自らの「居場所」を獲得し、自らの存在を支え得る、という強い気持ちがあるからだと分かる。そして、そのような財産が失われてしまったら、人は一体、どうやって自らを支え得るのか。「フラット」であることを自明のこととし、消費のサイクルの早いサブカルチャーと、その内部で流通する言語のみでは、あまりに脆すぎる。なぜならいくらグローバリゼーションが進み、「フラット」化がどれほど広がるかが、一旦「世界」に出るなら、「東洋の女性」というマイノリティの刻印から逃れることは容易ではなく(アメリカが顕著な例だ)、そうである以上、それを引き受け、拮抗するためには「言語(良質な文化・教養)」という武器を自らのものとする必要があるのではないか。そのような危機感が水村に件のようなエッセイを書かせたのだろう。そして主張が主張だけに、本エッセイが反動的なナショナリズムの書としても読まれがちなのは否定できないが、水村が書いた小説では同じ主張であってもより深い説得力を持ち、より広範な読者に受け入れられていることは、ここで一言述べておくべきかもしれない²¹。ではこの水村からの提言を受けて、本稿のまとめを行いたい。

20 ここで「日本文学」の伝統を「歌う」ことに見、それが現代日本においては「失われた魂」となっていると述べたのは M・J・デ・プラダ＝ヴィセンテと大嶋仁『ゆらぎとずれの日本文学史』(ミネルヴァ書房、二〇〇五)である。

21 例えば『日本語が亡びるとき』に先行する小説『本格小説』は高い評価を受けている。一例としては「途中で何度本を閉じ、嗚咽の声をもらしたことか」(深澤徹)や「今の小説としては、村上春樹より、全然いい」(福田和也)等。詳しくは注3 拙論参照のこと。

5、さいごに

近年は「外国語教育」としての「日本語教育」では、より実用的な教材を選ぶ方が効率的だ、という意見を時折、耳にするし、高等教育機関とはいえ「文学作品」を教材に扱って役に立たない「教養」ばかり身につけることを主眼においては、将来、「日本語」(語学力)を武器に実社会に入る人材を育てる上で圧倒的に不利だ、という意見も耳にする。大学のカリキュラム編成の際も、「文学鑑賞」に時間を割くより、法律やコンピューターなどの単位を多く取って、将来の就職に役立てる方がよい、という意見も実際、出されたりもする。勿論、筆者は法律やコンピューターという課目を、それに興味のある学生が積極的に学ぶことはとても良いことだと思っている。だが、だからと言って、何語であれ、語学を学ぶ際、「文学作品」が選ばれることが「効率が悪い」とは決して思わない。その理由は前節まで述べてきた通りである。

ただし一言付け加えておくと、近代日本において、西洋の思想や哲学を漢字表記で翻訳する作業に拮抗する形で「文学」、特に「小説」が生まれ、それらの作品が「日本語の共同体」において「生の深部に宿るような深刻な問いに対処しうるもの」として生成してきたのなら、それを近代、日本の植民地となった台湾がどのように受け止めてきたのか、という観点も含めた日本語教育が、現在の台湾では行われることは非常に意味のあることだと思う。そして「台湾」という固有の(シンギュラーな)歴史を持つ地域においては、「日本語」は水村が言うような「ブルドーザーで押しつぶされる側」にある言語、というだけではなく、「ブルドーザーで他言語を押しつぶす側」にもあった、という歴史の一側面に向き合う作業も避けては通れないだろう。

また「近代日本」とどまらず、その射程を更に過去(近代以前)に向かって広げるなら、「日本語の共同体」が「中国語(文学・歴史・思想)」の「翻訳」なしには存在しえなかったことは多くの論者が指摘しているが、デ・プラダ＝ヴィセンテと大嶋仁²²はそういった「日本文学」の基調を成すのは「歌」であり、その「歌」の集積にこそ「民族の魂の記録」が刻み込まれていると言う。現在中国語を母語(の一つ)とし、「中国語の共同体」の一員としてその言語的蓄積・財産を有する人々の目からそのような「日本語(文学・文化)」を眺め返してみるなら、語学・文学教育の現場であれ、研究の場であれ、より豊かな発見、気付きがあるはずだ。そしてそういった場での討

22 M・J・デ・プラダ＝ヴィセンテ 大嶋仁『ゆらぎとずれの日本文学史』ミネルヴァ書房、二〇〇五、
大嶋仁『日本人の世界観』中央公論社、二〇一〇

議を通じて、「正しい日本語」「正しい中国語」「正しい〇〇語」といったものの存在を前提とし、その所属権をナショナリティと強固に結びつけていく考え方に、風穴を開ける可能性が秘められているのではないか。

そして最後に、過去のみならず未来に眼を向けるなら、90年代以降、グローバリゼーションの流れを受け、「文学」の役割、「小説」の役割は変化し、大学教育における「教養の意義」も改めて問われるようになってきた。これは日本や台湾だけに限られる現象ではなく、それこそ全世界に共通の流れと言えるだろう。このような過渡期にあって、何を「日本語の共同体の財産」としていか、ということは今後、それに関わる私たち一人一人が真摯に受け止め、考えていくべき問題だろう。そしてそれを決める「日本語の共同体」に属するのは、「日本語」を用いる全ての人であるべきではなからうか。

(Sakamoto Saori 輔仁大学日本語文学系)

《付記》

本稿は2011年6月11日、東海大学で催されたシンポジウム『日本文学教育在台湾 ―実践現状と面臨課題―』での発表「台湾の高等教育期間における『日本近代文学教育』のあり方―「文化・教養」は継承されるべきなのか―」を加筆訂正したものです。席上でご意見をくださった方々に、この場をかりて厚くお礼を申し上げます。

参考文献

(テキスト)

- 水村美苗『續明暗』筑摩書房、一九九〇
水村美苗『私小説』新潮社、一九九五
水村美苗『本格小説』新潮社、二〇〇二
水村美苗『日本語が亡びるとき』筑摩書房、二〇〇八
水村美苗『日本語で読むということ』筑摩書房、二〇〇九
水村美苗『日本語で書くということ』筑摩書房、二〇〇九

(論文、雑誌、書籍)

- 東浩紀『郵便的不安たち』朝日新聞社、一九九九
東浩紀 北田暁大『東京から考える 格差・郊外・ナショナリズム』日本放送出版協会、二〇〇七
宇野常寛『ゼロ年代の想像力』早川書房、二〇〇八
大澤真幸『思想のケミストリー』紀伊国屋書店、二〇〇五
大澤真幸『増補 虚構の時代の果て』筑摩書房、二〇〇九
大嶋仁『日本人の世界観』中央公論社、二〇一〇
押野武志「フラット化する文学」『日本文学』一月号 日本文学協会、二〇〇八
笠井潔『例外社会』朝日新聞出版、二〇〇九
加藤典洋、高橋源一郎「いまどきの小説の気分」『小説 tripper』・冬季、朝日新聞社、二〇〇四
加藤典洋『文学地図』朝日出版社、二〇〇八
小平麻衣子『女が女を演じる』新曜社、二〇〇八
斉藤美奈子 朝日新聞「文芸時評」(二〇〇八・十一月・二十六)
M・J・デ・プラダ＝ヴィセンテ 大嶋仁『ゆらぎとずれの日本文学史』ミネルヴァ書房、二〇〇五
水田宗子「女への逃走と女からの逃走－近代日本文学の男性像」『日本文学』日本文学協会、一九九二
『批評空間』II-3、一九九四
『ユリイカ 特集 日本語は亡びるのか?』青土社、二〇〇九